板東先生！
多様な声を集めた大学関係者たちが催した
数々の思い出を聴いていただけますか？

京都大学名誉教授／国際経済労働研究所　所長　本山　美彦

人を寄せた先生

思いがけない人に、それとなく自然な形で逢わせてくださったのが、板東慧先生であった。

まずその代表。神戸市長であった「原口忠次郎」。お合いしたとき、「小学生時代に市長の指示で六甲山に木を植えに行きました」と緊張して話す私に、好々爺そのものの笑顔でうれしがってくださった。山を削った土で海面を埋め立ててポートアイランドなどを整備し、山を削った跡をニュータウンなどとして開発する事業（いわゆる「山､海へ行く」と呼ばれた事業）を行ったほか、六甲山トンネルを含む六甲有料道路、神戸ポートタワー、神戸高速鉄道、さんちか（地下街）、明石海峡大橋の実現に向けた調査などに行政手腕をふるったという「すごみ」とか、社会党の推薦で神戸市長になったいきさつなどは微塵にも出されなかった。

２番目に強烈な印象を与えてくれた人は、「ジョン・ウィーク」（John Weeik）。オーストラリア国籍の日本文学の研究者である。会うなり「自分は、あなたに年に１度会うとの約束で、米国のCIAから給料をもらっている。年に１回会ってほしい」と言ってきた。それも板東先生の紹介でという。話してみたら、政財界のことはいっさいに話題にせず、日本文学、それも中世以前のものばかりであった。『神皇正統記』を訳したそうだ。いつも話が弾んだ。

私がクィーンズランドの安宿で仕事をしているとき、血相を変えて飛び込んできた。「台湾で大変なことが起こったぞ！国民党でもなく、外省人でもない『李登輝』が総統になったぞ！」と｡京都人でも李登輝のことは忘れていたのに。

３番目の思い出は、阪神・淡路大震災の片付けの過労がたたって、死去された「山下彰啓」。震災前は、高校が同じだというので心を開いて自治体が直面している諸問題を率直に話してくれた。震災後は板東先生とともにお手伝いしたが、及ばなかった。

文字数の制約があって、この３人との出会いの感動を詳しく述べることはできないが、一言でまとめると「多様な人を多様なまま活かせる」という阿吽の呼吸の大切さを、私は、先生から学んだ。

イデオロギー抜きに素直に付き合えた多様な京都人たち

この呼吸が「当たり前」のように漂っていたのが、板東先生が過ごされた1950年代、私が過ごした1960年の京都であった。

以下、松尾尊兊「敗戦直後の京都民主戦線」『京都大學文學部研究紀要』第18巻／

1978年（http://hdl.handle.net/2433/73001）で記憶を辿りつつ、当時に漂っていた雰囲気を語りたい。

とくに、文化的に強い影響をもっていたのは、1946年10月に結成されていた「京都自由人協会」であった。高山義三・住谷悦治・新村猛・溝口健二らが中心メンバーであった。

この協会は、「近代精神涵養講習会」を開いていた。講師は、湯川秀樹・田畑忍・青山秀夫たちであった。

誰でも参加できる「近代日本研究会」という読書会も開かれていた。協力者は、羽田亨・新村出・谷口吉彦・堀江保蔵たちであった。

野坂参三らが構想していた「産業労働調査所」にちなんで、「京都産業労働調査所」を創設したのが、名和統一であった。調査所の活動は、地元の産業調査、労働組合の動向、西陣織物業界の細部にわたる調査等々であった。この調査所は、いまの「自由民主党」の前身である「自由党」の中の進歩派が主導していた。とくに、西陣調査は、堀江英一が指導していた「京大社会科学研究会」の学生たちによって担われていた。それだけでなく、財政難に苦しむ同研究所を助けたのは、小段文一らの京大の学生たちであった。

1946年10月、同調査所には、新たに「京都教員組合」・「市電労働組合」・「全逓京都地区協議会」・「国家公務員共済組合連合会」・「京都民主党」・「日本レース労働組合」などが加わった。「待遇改善要求のための資料作り」・「労働学校の運営」・「機関紙（京都産労ニュース、月２回発行）」などの活動が1954年まで続けられた。

1946年６月に発足した「京都人文学園」は、若者に大きな影響を与え、同年６月に開校した「人文学部」には定員50名のところ300名を超える応募者が殺到した。やむなく試験の末、110名を収容した。この京都人文学園は、1957年３月に「京都勤労者学園」となった。

夏期講座には、林健太郎・高島善哉・宮城音弥・清水幾太郎・大河内一男・岸本誠二郎・湯川秀樹・中野好夫等々が講師陣に加わった。

素晴らしかった。幸せであった。

そうですよね？板東先生！

2025年７月15日